

〔PBLの風と土 第31回〕

あるものさがしで地域での可能性を拡張

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授・立命館大学サービスラーニングセンター長）

【前回までのおさらい】

筆者は2017年度にデンマークのオールボー大学（AAU）で学外研究の機会を得ました。AAUでは1974年の開学当初から全学でのPBL（Problem-Based Learning）の導入で知られており、現地から本連載を始めました。

連載2年目はアイルランドで刊行されたPBLの書籍をもとにAAU以外での知見を紐解きました。連載3年目からはサービス・ラーニングとの比較を重ね、4年目はコロナ禍での立命館大学の科目への影響を、5年目からは米国での大学・地域連携の教育に関わる理論を解題し、8年目となる2024年度は再び筆者の教育実践を紹介中です。

1. 受け身としての消費者主義の回避へ

2024年11月、3回目となる京都モダン建築祭が開催された。これは2022年に文化庁京都移転記念事業として明治期以降に建築された京都市内の近現代建築が一般公開された取り組みが翌年度以降も継続・発展させて取り組まれているものであり、2023年には同じ枠組みで11月に神戸でも開催されるようになった。関西での大阪で2014年から生きた建築ミュージアムフェスティバル（通称：イケフェス大阪）が参加費無料で開催されてきているが、後発の京都や神戸では有料での開催である。また2024年には5月25日～26日に第1回となる東京モダン建築祭が開催されており、京都モダン建築祭・神戸モダン建築祭・東京建築祭、これら3建築祭の事務局を担う合同会社まいまいが各建築祭を立ち上げた3人のナビゲーターと共に建築祭オフィシャルクラブも設立するなど、近代建築には幅広い関心が寄せられている状況にある。

立命館大学は2023年より、2回目の京都モダン建築祭に参加している。これは2023年2月、京都モダン建築祭の事務局より立命館大学衣笠キャンパス地域連携課に対して参加が打診されたことが契機となった。もとよりキャンパス施設の一部は公開されているものの、授業時間には自由に見学ができない上、そもそも通常は非公開の施設もある。こうした事情を踏まえ、京都モダン建築祭の拡大に際し、立命館大学が2013年に京都府から譲り受けた旧堂本印象邸等を公開対象にできないかと投げかけられた。



写真1：京都モダン建築祭での旧堂本印象邸の公開（筆者撮影、2023年11月4日）

京都モダン建築祭事務局からの打診の後、立命館大学では2023年3月9日の総務部会議にて参加の提案が審議され、2023年11月に以学館、末川記念会館、旧堂本印象邸を公開する方針が決定した。1965年に竣工した以学館は衣笠キャンパスにおいて現在も使用中の校舎の中でも最も古いものであり、京都を中心に数多くの建築を手がけた富家宏泰先生の設計によるものである。以学館をはじめとして、衣笠キャンパスは煉瓦色の外壁タイルを基本とした建物群で構成されているが、そうした展開を含め、「平和と民主主義」の教学理念のもとで学園の価値創造の旗手となったのが当時の末川博総長であり、その業績を讃えるために1983年に富家建築事務所の設計で竣工されたのが末川記念会館である。なお末川記念会館には、1998年に法学部卒業生の松本仁介さんの寄付により京都地方裁判所の旧庁舎から移設された陪審法廷が「松本記念ホール」として設置されている。

僭越ながら筆者は立命館大学にて2023年と2024年と連続して京都モダン建築祭のガイドツアーの案内役を担わせていただいたのだが、それは建築祭事務局から公開が期待された旧堂本印象邸を筆者が2018年より授業の教室として利用してきた縁による¹⁾。旧堂本印象邸は、その名のとおり日本画家の堂本印象先生の旧邸宅で、2013年に学校法人立命館が一般競争入札で京都府より土地・建物（居宅とアトリエ棟と作品収蔵庫および庭）を購入したものである。その後の改修を経て、2018年度より授業等で利用できる可能性が出てきたことから、2017年5月29日のサービスマーケティングセンター定例会議での「正課教養科目『教養ゼミナール』における2018年度前期期間の堂本別邸の使用について」の議決を経て、法人の総合企画課に企画を提案、そして次年度に向けた各所の調整を経て一般には非公開の施設を教室として利用する授業が開講できることになった。これらの調整は筆者が学外研究期間中にデンマーク・オーホルボー大学に客員研究員として滞在していた際に行われたものだが、前回の予告のとおり、今回はこの旧堂本印象邸の利用を契機としてキャンパスに隣接する京都府立堂本印象美術館との連携・協力に基づく複数の教育実践について取り上げ、地域社会でのボランティア活動を組み込む意義に接近することとしたい。

2. 堂本印象美術館と立命館とのご縁

旧堂本印象邸については立命館大学衣笠キャンパス地域連携課が開設している特設ウェブサイト (<https://domotoinsho-house.com>) に概要や歴史が端的にまとめられており、そこには、2006年6月より2012年3月まで、学校法人立命館が京都府立堂本印象美術館の指定管理者となっていたことが記されている。この立命館による「指定管理者制度に応募し、本学が堂本印象美術館の指定管理者となることを目指す」という方針は、2005年10月19日の常任理事会に教育文化事業推進部（当時）が起案したものであり、2006年9月の朱雀キャンパスへの本部機能の移転を前に、衣笠キャンパスを拠点に整備されてきた「アトリエサーチセンター」や「国際平和ミュージアム」「無言館京都館」

などによる「ユニバーシティミュージアム群」の形成を推進すると共に、立命館大学が衣笠地域で地域連携機能を発揮することを目指したものであった。しかし、2009年度からの第2期の指定管理期間の満了を迎えるにあたり、教学の充実が一部にとどまり、研究面でもプロジェクトの萌芽などが見られなかったこと、また財政上の理由から地域連携も広がらず、加えて耐震補強の必要箇所が明らかとなった上に、文部科学省から学校法人の会計処理に関する指導がなされたこと、これらを総合して2011年10月26日の常任理事会において第3期の指定管理者には応募しないと議決された。一方、前述のとおり一般競争入札により取得した旧堂本印象邸は、2017年11月29日の京都キャンパス将来構想検討委員会で「伝統的な日本家屋、茶室を利用した教育・研究活動、学術交流・発信、学生の活動発表、国際交流、地域交流など」を目的とした「学術・交流スペース」と定められ、活用が図られることとなったという背景がある。

立命館大学が旧堂本印象邸の活用方針および利用要項を定めるにあたっては、立命館大学理工学部の青柳憲昌先生がまとめた「旧堂本印象



京都が誇る日本画家・堂本印象

堂本印象は、日本画家として、数多くの作品を残している。それら作品の数は、京都府立堂本印象美術館に収蔵されているところであるが、かつて印象の邸宅であった旧堂本印象邸は、美術館の隣地に立地している。敷地には、母屋の敷、茶室、アトリエ、倉庫が残されており、母屋は、印象が衣笠の庵に転居した。1943（昭和18）年に建てられた近代和風建築である。衣笠は、大正年間から昭和9年ごろにかけて、日本画家の大家とその門下が集まった場所となり、「まれがき絵巻村」と呼ばれ、文化・芸術の拠り所となっていた。

図1：立命館大学による旧堂本印象邸のウェブサイト（トップページの一部）

邸の建設経緯と意匠的特徴」（青柳，2015）が基礎資料として取り扱われている。そこでは京都地方法務局の「旧土地台帳」により昭和13年11月21日に堂本印象先生が一部の土地を取得したことを踏まえ、「堂本が衣笠に転居した昭和18年頃は、立命館大学の衣笠キャンパスが拡大し、キャンパス東部がおよそ現在の形状となった時期にあたる」（p.663）点に着目し、「堂本が自邸を計画・建設したのは昭和17年以降、つまり昭和18年5月とされる堂本の転居直前であった可能性が高い」（p.664）としている。このことから、立命館大学衣笠キャンパスと堂本印象邸は、同じ時期から衣笠の地で歴史を刻んできたことがわかる。そこで京都モダン建築祭でのガイドツアーでは、旧堂本印象邸を通して「衣笠絵描き村」²とされていた衣笠地域に立命館大学が拠点を置いてきた歴史的背景を、そして以学館・末川記念会館を通じて「平和と民主主義」を理念に発展してきた社会的・文化的な背景を紹介する機会となっている。

ただし、立命館大学衣笠キャンパスは学園の発展の経過で近隣住民の生活環境の悪化を招くこととなり、大学と地域のあいだには高い緊張関係が生じてしまうことになった。実際、立命館大学の百年史（立命館史編纂委員会，2013）にも「1981年3月の衣笠一拠点の完成に伴い、地域と大学の関係もそれまでにない問題が生じてきた」（p.406）こと、特に「迷惑駐車・駐輪や建設工事の問題」（p.770）などについて、各種の対策と対話が重ねられてきたことが記されている。大学と地域との対話にあたっては、「1985年3月、谷岡武雄総長は、学園近隣の町内会長に大学の施策を説明し理解と協力を得るため、就任挨拶を兼ねて地域懇談会を開催」（p.407）、そして「89年度からは地域懇談会に加えて隣接地域の住民と直接懇談する隣接地懇談会を開催し、大学の運営や諸施策について説明するとともに通学問題をはじめとした諸問題について懇談し、その解決を図る取組みを進めた」（p.408）という。これら2つの懇談会は現在まで継続して開催されているものの、懇談会を通じて地域から大学に要請される事柄に大学が応じるだけでなく、むしろ大学と地域のあいだで日常的な連携・協力が不可欠で

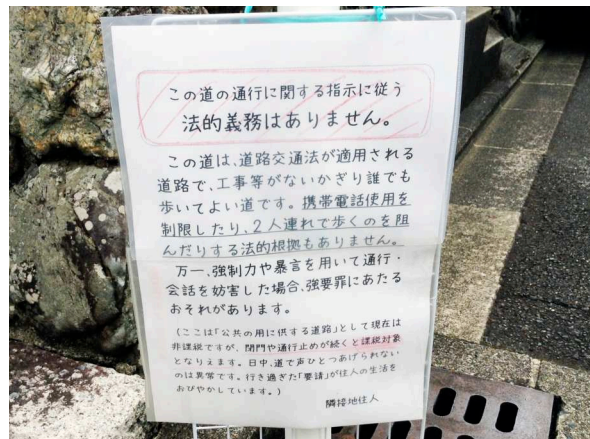


図2：行きすぎた「要請」に対する問題提起を行う衣笠キャンパス隣接地住人が作成・掲出した文書（2014年8月1日、筆者撮影）

あることを、例えば図2に挙げた写真のようなキャンパス隣接地住人が作成・掲出した文書などが気づかせてくれる。

近隣住民との丁寧な関係構築の進展とあわせて、2004年には立命館大学が事務局を務める京都歴史回廊協議会が設立され、衣笠地域で多様な協働の機会が創出されるようになった。立命館の百年史（立命館史編纂委員会，2013）によれば、京都歴史回廊協議会は「『地域文化遺産』『国宝』『重要文化財』の数々を、市民・学・産の英知と力を結集して『回廊』として結び、『面』でとらえる」（p.1721）ことで「地域の魅力を飛躍的に増大」（p.1722）させることを企図したものであるという。こうした組織的なネットワークが衣笠地域で展開される中、立命館大学の正門前にある京都府立堂本印象美術館も協議会のメンバーとして各種の事業に積極的に参画している。例えば、京都府立堂本印象美術館との共同主催で総本山仁和寺の協力のもと「仁和寺の建物探訪と堂本印象の襖絵観賞会」（2023年1月21日）が、さらに大本山妙心寺の協力により「中心伽藍としての法堂と仏殿」（2024年2月17日）が開催されており、学生と一般の方々と共に学びを深めつつ地域の魅力を体感できる場が生まれている。

3. 学生が旧堂本印象邸と美術館を結ぶ

立命館大学が近隣住民や地域の組織との連携を深めてきた中、前述のとおり、筆者は2018年から旧堂本印象邸を教室に用いた授業を企画・開発してきた。立命館大学には2008年度

から担当教員とテーマを全学に公募し、所属学部・学年を横断した演習科目「教養ゼミナール」が開講されている³。そこで、旧堂本印象邸の活用をテーマとした教養ゼミナールとして「地域経営実践ゼミナール」と題して開講した。核に据えたのは鳥取県智頭町の地域活性化のための計画手法として開発された「四面会議システム」を導入することであった。折しも開発者の一人、寺谷篤（筆名：寺谷篤志）さんが転地療養の一環で智頭町から京都市内に移住されたこともあり、立命館大学の教養教育支援制度を活用し、3回のゲストスピーカー枠の全てを寺谷さんの招聘に充て、旧堂本印象邸の活用をテーマに据えつつ合意形成の方法論が習得できる授業として設計し、20名規模で開講した。

初年度となる2018年度の教養ゼミ「地域経営実践ゼミナール」の取り組みは、書籍『はじめてのファシリテーション』で「堂本印象旧邸宅の活用」としてまとめた（山口，2019）⁴。



図3：四面会議システムを通じた議論の様子
(2018年6月26日、筆者撮影)

大学と地域をつなぐ新たな活動の場へ 印象どうもっと 学生企画	
堂本印象美術館の向かい側にある伝統的な建物を、 旧堂本印象邸は立命館大学の施設です。 この施設は立命館大学生なら誰でも利用できます。	
旧堂本印象邸 リニューアル後 初のイベント を開き、学生と子どもたちが宝探しや昔遊びを通して交流を深めます。	▶内容 旧堂本印象邸に、衣笠幼稚園の子どもたちも参加し、学生と子どもたちが宝探しや昔遊びを通して交流を深めます。
2018 7/10(火) 11:00 ~ 12:00 入場無料	
立命館大学正門より徒歩1分 	

図4-1：2018年度「印象どうもっと」(宝探しや昔遊びで交流)

★入場・観覧無料! ★展示会は今だけ! Image of Kyoto ~アートで感じる「チノ」の世界~ アート展示会	全学教養科目「教養ゼミ」 担当:山口洋典 (yamaguchi@ritsumei.ac.jp) 790-0161-8487 の授業室による企画です。
日: 7月9日 11時~18時 出展: 立命館大学美術研究部 立命館大学陶芸部 ◎会場: 旧堂本印象邸	
☆普段アートに関わらない学生や地域住民の方々に向けて展示会を開催! ☆陶芸などの芸術作品に触れたいだけの展示会です!	

図4-2：2019年度「Image of Kyoto」(美術研究部・陶芸部の展示会)

図4：教養ゼミナール受講生による企画チラシ



図5：旧堂本印象邸の活用企画「印象どうもっと」
(2018年7月10日、筆者撮影、園児の服の一部を加工)

2018年度は初年度ということもあり、「地域資源の活用と四面会議システムの習得」というサブタイトルのもと、衣笠キャンパス地域連携課と緊密な連携の中で活用策を検討した結果、近隣の幼稚園児を招待し、庭の随所に隠したカプセルを見つける「宝探し」と、折り紙をはじめとした「昔遊び」を通じた交流企画を実施するに至った。2019年度は改めて「旧・堂本印象邸の活用により『あるもの』を活かす」をサブタイトルに、新たに立命館大学の地域資源となった旧堂本印象邸が画伯の邸宅であったことを踏まえた活用策を検討し、立命館大学で芸術文化活動にあたる団体（美術研究部・陶芸部）の協力でアート展示会を開催し、教養ゼミナールでの展示経験を得た各団体に今後の制作・発表が充実するよう期待をかけることにした。



図6-1：受付の様子
(アンケートの回答者には特製のバッジを贈呈)



図6-2：美術研究部の展示
(青柳(2015)によれば「真行草」の様式での3室にて)



図6-3：陶芸部の展示
(内玄関の横の間にて)



図6-4：陶芸部の展示
(応接室にて)

図6：旧堂本印象邸の活用企画「Image of Kyoto」
(2019年7月9日、筆者撮影)

こうして教養ゼミでは、2018年度は地域の方々に存在を知らしめる、2019年度には立命館大学内での活用可能性を高める、それらに力点が置かれた企画が実施されたが、2019年度に思わぬ展開がもたらされた。企画当日に京都府立堂本印象美術館の下河邊英寿副館長（当時）が来訪され、一連の取り組みへの高評のもと、立命館大学とのさらなる連携・協力の可能性を模索したい、との提案をいただいたのである。加えて、美術館は2018年に「入りやすく親しみやすい美術館」をコンセプトに大規模リニューアルが行われ、立命館大学の美術研究部と陶芸部は美術館の野外庭園で作品展を開催していた、という縁があったことも確認できた。そして2019年7月30日に筆者が美術館を訪れ、秋semesterで筆者が担当している「ソーシャル・コラボレーション演習」において、京都府立堂本印象美術館と立命館大学との連携の可能性をテーマに取り上げることとした。

ソーシャル・コラボレーション演習は2012年度にサービスラーニング科目の1つとして開講されたものであり、当時からPBLの略称で呼ばれていた問題解決型のプロジェクト学習と授業内にボランティア活動を組み込むサービスラーニング手法と効果的に組み合わせた、自己と社会の未来を構想・設計する演習型科目である⁵。そのため、プロジェクトで取り組む課題は地域社会から提示いただくこととしていた。衣笠キャンパスでの筆者の担当クラスでは2012年度から2018年度までは学生の通学マナー向上を主要な課題としていたため、衣笠キャンパスでは地域連携課から課題の提示を得てきた

が、それを2019年度からは京都府立堂本印象美術館にお願いすることにした。そのため、図7のレジюмеに盛り込まれたとおり、学生たちは美術館の存在価値の向上、来館者の増加、財政状況の安定化の3つの課題に取り組み、代表的な活動として「館内解説動画への中国語と英語の字幕付与」（2019年度）、「堂本印象作品をモチーフにしたTシャツとプロモーション動画の制作」（2020年度）、「落語研究会による堂本印象の人生と美術館の紹介動画の制作」（2021年度）などが展開された。

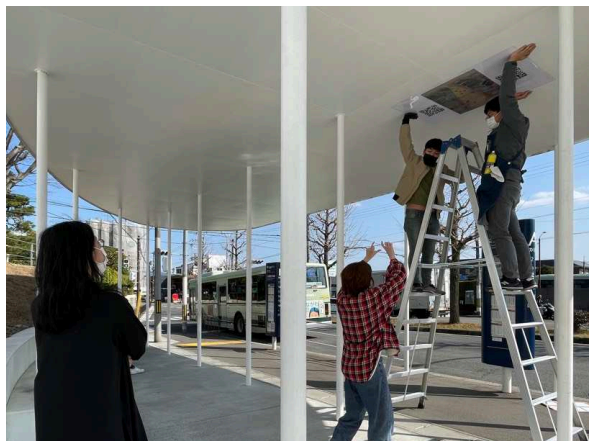


図8：バス停への巨大QRコード付ポスターの掲出（2021年3月15日、筆者撮影）

4. コロナ禍とカリキュラム改革を経て

こうして立命館大学が取得した旧堂本印象邸の活用をテーマとした2018年度からの教学実践は、2019年度に京都府立堂本印象美術館との連携へと発展し、衣笠地域の歴史的・文化的な資源を最大限に活かす方向へと展開していった。しかしながらソーシャル・コラボレーション演習は2020年度の教養教育改革によって閉講となり、経過措置のもとで開講された2021年度で一つの区切りを迎えざるを得なかった。そこで2022年度からは、前回も紹介した「シチズンシップ・スタディーズ」の受入団体として京都府立堂本印象美術館とのパートナーシップの継続・発展を図ることにした。ただし受講生からの提案を重視する「ソーシャル・コラボレーション演習」と異なり、「シチズンシップ・スタディーズ」では受入団体が予め提示する活動計画書に基づく活動と学習のため、美術館における「若者向けの広報」がテーマに据えられ、2024年度も継続して開講されている。

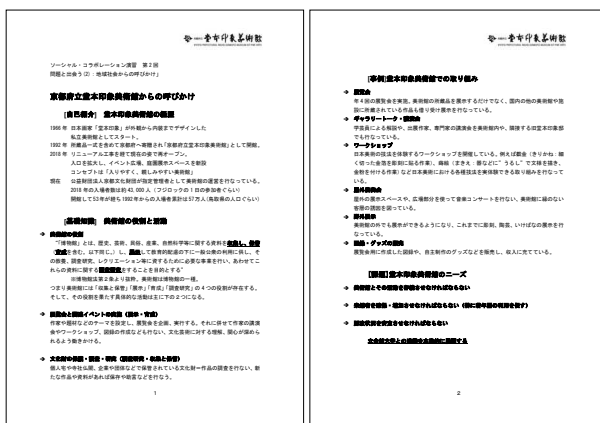


図7：ソーシャル・コラボレーション演習で提示の課題（2019年10月8日、京都府立堂本印象美術館が作成・配布）

このように大学のカリキュラム改革にも積極的に応じていただけたのは、特に京都府立堂本印象美術館で窓口担当の総務課・主事の谷本栄作さんをはじめとしたスタッフの皆さんの熱意に加えて、長い時間をかけて美術館側が大学に対する期待と信頼を寄せられるだけの関係を築くことができたことの証左かもしれない。無論、1980年代以降に近隣住民からの大学への要請に応え続けてきたことや、京都歴史回廊協議会の設立で特に2000年代以降には衣笠地域の組織間ネットワークが維持・発展してきた経過も影響しているだろう。こうした期待や信頼、さらには経過が、立命館大学の地域連携をもとにした教学に確実に奏功したのがコロナ禍である。事実、2020年に新たに開講した「現代社会とボランティア」において、筆者の担当するクラスでは授業内実習として2回のボランティア活動を組み込んでいたが、京都府立堂本印象美術館には率先してその活動先として受入の対応をいただけたのである。

コロナ禍を経て、筆者が担当する「現代社会とボランティア」では、京都府立堂本印象美術館の他、学校法人立命館が設立した特例子会社

「株式会社立命館ぷらす」、さらには衣笠キャンパス地域連携課を通じた「嵐電沿線フジバカマプロジェクト」、その他、御室小学校での下校の見守り活動、総本山仁和寺での境内等の清掃活動など、衣笠キャンパス内や隣接地域での活動を通じた学びと成長の機会を継続的に提供することができている。ここに挙げた活動先は、コロナ禍において「教室で学ぶことができない」という特殊状況の中、水俣での「地元学」の実践における地域の風土と暮らしに着目して「あるもの探し」(吉本 2008, p.38)が重要とされた地元学の知恵に学んだものである。自らのポテンシャルと地域のニーズを相互にすりあわせる中で、「○○がない」あるいは「△△ができない」といった具合に不足や欠落を憂うのではなく、むしろ地域のポテンシャルが自らのニーズを高めることさえあることを、筆者はコロナ禍での創意工夫を通じて実感してきた。そこで今回はキャンパス内および近隣の活動を通して学ぶことの意義について、衣笠キャンパス地域連携課との連携・協力に基づく事例から取り上げることにしたい。

(gucci@fc.ritsumei.ac.jp)

【引用文献】

- 青柳憲昌. 2015. 旧堂本印象邸の建設経緯と意匠的特徴. 日本建築学会大会学術講演梗概集2015. 663-664.
- 立命館史編纂委員会. 2013. 立命館百年史：通史3. 学校法人立命館.
- 山口洋典. 2019. 堂本印象旧邸宅の活用：四面会議システムを用いた地域経営への事起こし. 鈴木康久・嘉村賢州・谷口知弘(編). はじめてのファシリテーション：実践者が語る手法と事例. 昭和堂. 122-125.
- 吉本哲郎. 2008. 地元学をはじめよう. 岩波書店

【注】

- 1 2018年5月18日には、立命館大学のホームページの「TOPICS」において「旧堂本印象邸で、学び、活動し、成長する」と題した記事 (<https://www.ritsumei.ac.jp/news/detail/?id=1052>) が掲載され、「5月1日(火)からは、正課授業である共通教育推進機構の山口洋典准教授の教養ゼミナール「地域経営実践ゼミナール：地域資源の活用と四面会議システムの習得」の教室として使用しています」と紹介されている。
- 2 「衣笠絵描き村」については2022年の時点で行われた住民の方からの聞き取りにおいて「私の家の本当に近くにも、絵描きさんが何軒もありまして」という語りでも確認されている。この聞き取りは立命館史資料センターのホームページに掲載されている「<懐かしの立命館>等持院学舎(衣笠キャンパス)とその境界の話ーお隣に住んでいた方のパーソナル・ナラティブからー」 (<https://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=275>) で紹介されているものである。
- 3 教養ゼミナールについては、2013年4月12日に最終更新となっているサイト (<https://www.ritsumei.ac.jp/liberal/semi.htm>) に詳しい説明がある。その後「教養ゼミナール」は2012年および2020年のカリキュラム改革を経て、現在は「異文化間テーマ演習」と「超領域リベラルアーツ」と並んで、教養E群「学際総合科目」の1つとして位置づけられている。
- 4 この書籍では全般を通して各種ファシリテーションの手法とその実践事例の紹介がなされている。ただし、旧堂本印象邸の活用企画の検討に用いた四面会議システムは厳格に定められた手順がある。そこで「茶室と母屋のリニューアル工事が完了することを契機に、今後の活用の道筋をさぐるべく、全学の教養科目として、活用プランを考える授業」(山口, 2019, p.122)において、15回の授業をどう展開していったか、という観点から、授業進行の説明とあわせて手法の紹介を行った。
- 5 本原稿執筆時点で、科目の紹介が https://www.ritsumei.ac.jp/slc/curriculum/social_2019/ で確認できる。